11/9/2007

＊キリスト教学特殊講義＊＊＊＊＊　　S.　Ashina

２　宗教社会主義への展望

１　政治神学の可能性

政治神学とは何か―モルトマン、ゼレ―

政治神学と日本の文脈

政治神学と経済―富の問題―　11/9

２　正義と愛

現代政治哲学と正義論―ロールズ―　11/16

正義と愛の相補性―リクール―　11/30

正義と愛―キリスト教思想の問いとして―　12/7

４　展望―宗教的社会主義の射程―　12/14

Exkurs　現代キリスト教思想における宗教と科学

２　宗教社会主義の射程

１　政治神学の可能性

１－１：政治神学とは何か―モルトマン、ゼレ―

１－２：政治神学と日本の文脈

１．日本における政治神学の諸系譜

・横浜バンド・日本基督教会・東京神学大学

・日本組合教会・労働者伝道　→　関西労伝

・無教会とその周辺

・キリスト教社会主義・労働運動

２．キリスト教との関わりにおける近代日本の政治的争点

・明治、近代化

・大正デモクラシー、社会主義

・戦争、天皇制

・戦後民主主義、政教分離、平和憲法、愛国心、靖国

３．日本における政治神学の構築に向けて

近代日本における天皇制の意義・機能

日常的現実と包括的コスモロジーの基盤

理論から感性レベル、個人から共同体におよぶ影響

４．近代日本の宗教状況

重層性：表面的な断絶と深層の連続性

宗教概念の変形　→　現代の問題状況

近代化内部の緊張構造

欧化主義と復古主義：西欧的な立憲君主制と天皇中心国家
下からのナショナリズムと上からのナショナリズム

５．ティリッヒのプロテスタンティズム論
批判と形成、超合理と合理
４つの契機の統合
合理的批判（イデオロギー批判・社会学的批判）、合理的形成、
超合理的批判・預言者的批判（宗教社会主義）、超合理的形成・恩恵の形態

１－３：政治神学と経済――富の問題――

（1）キリスト教と富

政治神学について、経済との関わりという視点から議論するに先立って、キリストと富との関係を簡単に概観しておこう。

１．聖書における富をめぐる立場の多様性

旧約聖書

富を神からの祝福とする考え、知恵文学には、不正な富の獲得は別にして、富自体を肯定的に捉える言葉が散見

預言書や黙示文学には、貧富の格差や不正との関連における富あるいは富者への強烈の批判

新約聖書

旧約聖書の富者批判を受け継いだ議論（福音書、ヤコブ書、ヨハネ黙示録）

富自体よりもむしろ富に固執する欲望を批判する議論（パウロ書簡、牧会書簡）

＜聖書引用＞

「24:35　主がわたしの主人を大層祝福され、羊や牛の群れ、金銀、男女の奴隷、らくだやろばなどをお与えになったので、主人は裕福になりました。」（創世記 24.35）

「22:4 主を畏れて身を低くすれば／富も名誉も命も従って来る。」（箴言 22.4）

「5:18　神から富や財宝をいただいた人は皆、それを享受し、自らの分をわきまえ、その労苦の結果を楽しむように定められている。これは神の賜物なのだ。」（コヘレト 5.18）

「5:10 彼らは町の門で訴えを公平に扱う者を憎み／真実を語る者を嫌う。11 お前たちは弱い者を踏みつけ／彼らから穀物の貢納を取り立てるゆえ／切り石の家を建てても／そこに住むことはできない。見事なぶどう畑を作っても／その酒を飲むことはできない。12　お前たちの咎がどれほど多いか／その罪がどれほど重いか、わたしは知っている。お前たちは正しい者に敵対し、賄賂を取り／町の門で貧しい者の訴えを退けている。」（アモス 5.10-12）

「6:20　さて、イエスは目を上げ弟子たちを見て言われた。「貧しい人々は、幸いである、／神の国はあなたがたのものである。21　今飢えている人々は、幸いである、／あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、／あなたがたは笑うようになる。」（ルカ 6.20-25）

「9:10　種を蒔く人に種を与え、パンを糧としてお与えになる方は、あなたがたに種を与えて、それを増やし、あなたがたの慈しみが結ぶ実を成長させてくださいます。11

あなたがたはすべてのことに富む者とされて惜しまず施すようになり、その施しは、わたしたちを通じて神に対する感謝の念を引き出します。」（２コリント 9.10-11）

「1:9 貧しい兄弟は、自分が高められることを誇りに思いなさい。10 また、富んでいる者は、自分が低くされることを誇りに思いなさい。富んでいる者は草花のように滅び去るからです。」（ヤコブ 1.9-10）

「18:11　地上の商人たちは、彼女のために泣き悲しむ。もはやだれも彼らの商品を買う者がないからである。12 その商品とは、金、銀、宝石、真珠、麻の布、紫の布、絹地、赤い布、あらゆる香ばしい木と象牙細工、そして、高価な木材や、青銅、鉄、大理石などでできたあらゆる器、13 肉桂、香料、香、香油、乳香、ぶどう酒、オリーブ油、麦粉、小麦、家畜、羊、馬、馬車、奴隷、人間である。14　お前の望んでやまない果物は、／お前から遠のいて行き、／華美な物、きらびやかな物はみな、／お前のところから消えうせて、／もはや決して見られない。」（黙示録 18.11-14）

２．聖書全般に関して

(1) 不正義や過剰な欲望と結びつく富は否定される。

(2) 富あるいは富者についての論評は、共同体（たとえば教会）が置かれた社会的文脈に相関している。

↓

共同体が社会の経済的政治的な権力構造との関わりを深めるについて、富自体への否定的見解は後退する傾向

キリスト教の制度化や国教化がもたらした国家権力との関係変化

３．以上の富についての議論の骨子は、古代から中世そして近代初頭にいたるキリスト教思想史を通じてほぼ一貫している。富についてのキリスト教の基本的見解と考えることができる。

４．宗教改革と近代資本主義経済の成立

ウェーバー・テーゼ――「１．プロテスタントの職業観→２．カルヴィニズムの禁欲的エートス→３．資本主義の精神→４．資本主義の経済システム」――。

５．ルター(1483-1546)の宗教改革と新しい労働観や職業理解（１）。世俗的職業は生活費を稼ぐための単なる手段ではなく、修道院内の禁欲的な宗教生活に匹敵する宗教的意義を有するものと解されるようになった（使命としての職業)。

新しい職業理解は、カルヴィニズムの予定説と結びつくことによって、救いの確信を得るために、神が使命として与えた職業労働に厳格に従事するという禁欲的エートスの成立を促した（２)。

それは、生活を合理的に統御する生活態度であり、ウェーバーによれば、「資本主義の精神」――ベンジャミン・フランクリン(1706-1790)など初期の資本主義の実業家に見られる、勤勉、節約、正直、規律といった倫理的徳目によって構成された生活態度――に合致するものである（３)。

このような精神性を有する産業市民層の存在がまだ基盤が弱体であった勃興期の資本主義経済システムを内側から精神的に支持することになった（４)。

６．勤勉で誠実な労働や公正な投資の結果として獲得された富は宗教的にも肯定されるべ

きである。キリスト教は市場経済と十分に両立可能であると考えることができる。

７．アダム・スミスの道徳哲学と経済学は、「３」と「４」の結節点を構成する。

８．テーゼをめぐる議論の論点

・論理的帰結と心理的帰結

動機付けとしての予定説

・論理的連関と歴史的連関

資本主義の精神と資本主義的経済システムとの分離可能性

９．キリスト教と経済システム

一義的な関係づけは出来ない。キリスト教は一定の幅の中で多様な富の形態や経済システムと結びつくことができる。

↓

問題：人類が置かれた現代の歴史的状況下で、キリスト教信仰に照らして、いかなる経済システムを神の正義に適ったものとして選択するのか。

（２）政治と経済、あるいは政治神学と経済

１．公私二元論の形成

宗教的多元性（教派的多元性）の下での対立の克服

信教の自由（宗教的寛容）と政教分離原則

私的利害対立の問題領域（宗教、経済、道徳）を公から切り離す

近代市民社会的秩序の安定化

合理的討論による合意形成（議会制民主主義）の場の確保

↓

市場の自動調節機能、小さな政府（経済的自由主義）

↓

腐敗・恐慌・不況

政治の介入、修正主義

２．政治と経済の関係の多様性

二分法は抽象的（近似的）である　→　リンクの存在

一つのシステム（近代）の二つのサブシステム

経済における公共性

権力闘争としての政治とそれにエネルギーを供給し動機づける経済

近代における二つの関係性

市場経済合理主義の原理主義的純化（死の商人）と、

伝統的なシステムや国民国家の利用（妥協としての近代）

３．経済のグローバル化と国民国家の相対化

帝国主義後の帝国、経済の優位（世界の方向付けは国民国家としての超大国が行うのではなく、世界銀行や IMF を通じて資本の論理が決定する）

国民国家の役割、政治のグローバル化？

４．キリスト教的経済倫理の試み

近代的システムの批判的相対化

富や所有や労働、そして消費をめぐる近代資本主義的な理解の見直し
聖書的な富批判の中心的論点であった「公正」「正義」の確立

↓

地球規模の格差是正、生態系との共生、弱者への配慮といった倫理性に適った経済システム

５．モルトマン：政治→経済→環境

J. Moltmann, "Political theology in Germany after Auschwitz,"
in: William F. Storrar & Andrew R. Morton(eds.), *Public Theology for the 21st Century*, T & T Clark 2004.

What is now a thing of the past is the undue weight given to political existence, which in 1934 Carl Schmitt maintained was 'the whole'. The end of the East-West conflict has been followed by the globalization of the economy and the total marketing of everything, including the private sphere. Politics has deregulated and privatized the economy, and is now the subsystem of a greater economic system. Politics are still important, but they are no longer 'the world', the only world to which theology must turn its face.

The road leads from political theology to economic theology, and from economic theology to ecological theology. In a theology of life which comprehends God and the earth, the different contextual theologies, with their diverse contributions, can find themselves once more. (41-42)

６．東方敬信『神の国と経済倫理――キリスト教の生活世界をめざして』教文館、2001年

１章　経済倫理の課題と必然性
２章　キリスト教と経済
３章　神の国と経済倫理
４章　産業社会と産業精神
５章　グッド・ワーク（良い仕事）とは
６章　社会の消費文化
７章　所有の問題
８章　市場経済とキリスト教
９章　功利主義とキリスト教
１０章　環境と産業社会
１１章　飢餓と解放の神学

「経済学者宇沢弘文氏は、人間社会と経済活動の土台となるものを「社会的共通資本」として、「個々の経済主体に分属されることなく、一つの国ないし社会にとって共通の資産として社会的に管理され」る必要があると考えた。この社会的共通資本をどのように管理するかは、これからの課題である。アメリカでは、環境を含んだ市民社会の健康な文化的生活を支える社会的共通資本を「公共信託」と考えて、「石油汚染防止法」」などを立法化し、タンカーから流出した油汚染は、公共機関が責任を発揮して、原因者に対して財産被害だけでなく、環境改善のための費用も負担させるようになっている」（192）

「「一九九一年に「地球環境憲章」を掲げた財界の総本山経団連をあげることができる」「環境問題の背後に、環境価値をどう判断するか、私たちに新しい生活世界を示す宗教課題がある。そこで、自然に対する人間の意識の方向づけを考えたい。つまり、「征服」から「共生」へというスローガンである」（194）

「PL 法」「損害賠償のルールを「過失」責任から「欠陥」責任へ転換して」（195）

「環境経済学では、生活の質を考える「アメニティ」という概念が検討されている」「物質的欲望の世界から、芸術的、文化的世界へと人間の関心を移行する努力」（196）、「人間性の転換」（197）

「消費主義の蔓延している世俗社会は、クオリティー・オブ・ライフについて、あの聖餐式の神の自己贈与にもとづく、人間同士の感謝と相互贈与とを認めるときがきている」（200）

「人間の科学技術は、中立ではなく、「配慮の倫理」の脈絡に置かれねばならない」

「宗教改革運動の左派に属して、平和主義を追求したアーミッシュという共同体組織」「平和主義に基づくセツルメント方式による共同体形成」「移住し始めたときの一八世紀の文化を大切にしたシンプル・ライフ」（203）

「飢餓の問題」「その遠因は、植民地であった歴史として考えられる」「配分の問題」（209）

「途上国への経済開発」「九十年代になって、国際的な経済援助によっても、いやむしろそれゆえに、南北格差が解決されるどころかさらに広がっていくことに気づいた」「途上国への経済援助が必ずしもその国の大部分の人々の生活を豊かにしていない」（212）

「アマルティア・セン」「開発とは何か」

「「人々が真の自由を拡大してゆくプロセス」「単なる「選択の自由」ではない」「「飢餓や栄養失調、疾病、若年死といった窮乏状態からの脱出」であり、さらに「読み書きや計算、政治参加や検閲なき言論の享受」への自由」「成熟し責任を負える人々の生活を豊かにする」（213）

「閉鎖的個人主義や競合的個人主義ではなく、社会的連帯を視野に入れた自由の理解」「成熟した責任的な市民を支える社会」（213）

「グティエレスの『解放の神学』」（218）

「実践の強調」「先進工業国とりわけ多国籍企業の経済活動を「新植民地主義」」「民衆をその抑圧から解放するのがキリスト教の使信だと考える」（219）

「フレイレ」「意識化」（221）

「グティエレスがフレイレを評価するとき、聖書の論理から逸脱することになる」（222）

「マルキシズム」「神学よりも社会科学を優先する方法を前提にしている」「社会科学への依存」（223）

「人間としての質的喜びの経験」「聖餐式のもたらす「贈与と感謝と贈与」という「生の連鎖」「モノによらない、他者との関わりを喜ぶ至福の経験」（228）

・効用や基本財の平等→「基本的潜在能力」の平等（Amartya Sen）
basic capabilities

７．Cobb, John B. Jr., "Christianity, Economics, and Ecology," in: Hessel, Dieter T. and Ruether,

Rosemary Radford（eds）, *Christianity and Ecology. Seeking the Well-Being of Earth and Humans*, Cambridge: Harvard University Press　2000

１．新しいコンセンサスと現状
２．キリスト教の問題性と課題
①キリスト教徒はなぜ破壊を伴う科学技術を支持するのか（499/6-501/1）
1.科学技術は貧困を縮小する（必要なものを生産し雇用を創出する＝豊かにする）
これは経済学者の目標であり、キリスト教徒はその自然な支持基盤となる
経済発展のもたらすエコロジカルな帰結についての関心は、貧しいものへの配慮に従属する
2.キリスト教徒の価値観と経済学者とのそれとの近接性
物質的な必要を満たすという目標の共有
産業化を経て組織は社会を市場に再構築し、市場は、国家的、国際的、グローバルなものへと変化してきた。これは環境と共同体にとって破壊的であるが、それを批判するのは難しい。
3.人口増加・人口爆発
伝統的価値観における生命の神聖性、家族の重視
医学の進歩
３．政策レベルの問題とキリスト教
①税政策の転換（503/2-504/2）
②税と予算による人口増加への抑制効果（歳入歳出政策）（504/3,4）
４．経済成長とキリスト教
①キリスト教徒は支配的な経済的実践と理論とを批判しなければならない（504/5）
経済成長至上主義を断念すること
②成長自体とそれを達成する政策との区別（504/6-506/2）
経済的成長自体はエコロジーの敵ではない
成長志向的な政策
放棄できない特定の目標と一般化された経済成長（破壊的）との区別
③成長志向的な政策と権威主義的な強制のいずれにもよらない貧困の克服の例（506/3,4,5,6）
インドのケララ州の場合：女性による女性の教育
経済的成長の否定ではない
成長をすべての人々は共有し、環境への過度の付加を伴わないという仕方での成長の可能性
モデル的な価値
５．キリスト教の転換と経済・エコロジーの新しい関係
６．グローバル化における経済と政治（508/7-510/1）
①グローバルな経済についての議論の必要性（508/7）
・地域経済の強調、必要なものの多くをその地域で生産すること

交易することの自由と交易しないことの自由

・経済的な自律性は有意味な政治的自律性を可能にする(509/2)

しかし、地域の政治的自律性は絶対ではない、水利用の問題

・共同体の共同体を構成すること（広域的な共同体）(509/3)

経済的な自己充足性の度合いはこのレベルでより大きくなる

・国際連合(509/4)

補助的であるという原理、機能強化の必要性

・現在、政治的秩序には経済的秩序に対して奉仕することが期待されている(509/5)

多国籍企業や国際機関（IMF, WHO, 世界銀行）への権力の委譲

地球の運命は、株主に仕え総体的な経済成長を促進する意図を持った機関の手に握られている。地球を救うことはその基本的使命に属さない。

・経済関係の国際機関を強化された国連に従属させること(509/6)

方向を変えるということの一つの目標は、経済的秩序を政治的秩序のコントロールに引き戻すこと。普通の人間がそこで生きる規則の形成に参与することを可能にする。これは人々がその地域の環境に配慮することを保証しないが、チャンスはある。

７．キリスト教－失敗と課題－　(510/2,3)

＜参考文献＞

１．梅津順一『近代経済人の宗教的根源――M.ヴェーバー、R.バクスター、A.スミス』みすず書房、1989年

２．M.ヘンゲル『古代教会における財産と富』渡辺俊之訳、教文館、1989年

３．E.F.Schumacher, *Small is Beautiful. A Study of Economics as if People Mattered*, Muller, Blond & White Ltd., 1973（シューマッハー『スモール　イズ　ビューティフル　人間中心の経済学』小島慶三他訳、講談社学術文庫）

４．Max L. Stackhouse, *Public Theology and Political Economy*, University Press of America, 1991（シュタックハウス『公共神学と経済』深井智朗監訳、聖学院大学出版会）

５．山本栄一『問いかける聖書と経済』関西学院大学出版会、2007年